

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

16日(夜) No.14(最終)

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるように「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 最終回のテキスト ①

- 講義の最終回のテキストは創世記2章1～4節前半です。今回は最尾から見ることにしたいと思います。

【新改訳2017】 創世記2章4節前半

これは、天と地が創造されたときの経緯である。

ベヒツバルアーム ヴェハーアーレツ ハツシャーマイム トールドート エーツレ
אֵלֶּה תּוֹלְדוֹת הַשָּׁמַיִם וְהָאָרֶץ בְּהִבְרָאֵם

- 冒頭に「これは」とあります。原文は「これらは」(複数)という意味の「エーツレ」(אֵלֶּה)となっています。関根訳は「エーツレ」を「**以上が**」と訳しています。つまりこれまでの結論を示す接続詞です。1章1節は全聖書のタイトルとして位置付けましたので、2章4節前半のことばは、1章2節から2章3節までの経緯の完結を表しています。

1. 最終回のテキスト ②

●ところで、「**経緯**」と訳された語彙は「トールドート」(תולדות)です。これは「トーレードート」(תולדות)の連語形で「~の家系、系図、由来、次第、成立事情、後継者、歴史、系列、路線、成立史」とも訳されます。訳すと、元々のニュアンスを失ってしまう語彙の一つとされています。語源は「**生む**」を意味する「ヤーラド」(יָרָד)です。

●創世記5章1節の「トールドート」(תולדות)は「**歴史**」と訳されています。その系図の特徴は「だれがだれを生んだ」という定式で記されています。マタイの福音書1章の系図もこの定式で記されています。イエシュアにつながるきわめて重要な系図なのです。ヘブル人たちはなぜ系図を重んじるのでしょうか。それは、彼らが「生めよ。増えよ。地に満ちよ」という神の至上命令を果たすために特別に選ばれた民だからであり、そこからメシアが生まれ、やがては神のご計画を実現させ、多くの実を結ぶ民だからと言えます。

1. 最終回のテキスト ③

●ところで、2章4節前半までが一つの区切りのように見えますが、なぜ創世記1章が31節で終わっているのでしょうか。そのことを考えたことがあるでしょうか。

【新改訳2017】2章1節

こうして天と地とその万象が完成した。

ツエヴァーアーム ヴェホル ヴェハーアーレツ ハッシャーマイム ヴアイェフツルー
וַיְכַלֵּם הַשָּׁמַיִם וְהָאָרֶץ וְכָל־צְבָאוֹם

●2章1節の最初の接続詞を、多くの聖書は結論の接続詞「**こうして**」と訳しています。しかし新共同訳だけは接続詞を訳さずに、「**天地万物は完成された**」と訳しています。2章1節は1章2～31節と2章2～3節(安息と第七日)を結びつけています。前者は創造の目的が果たされた神の満足を告げ、後者はそのことで神が休まれる(安息される)ことが記されています。

2. 「天と地の万象が完成された」①

●ここで初めて登場する語彙は「**万象**」と「**完成された**」(受動)です。

(1) 「万象」= 「万物」(「ホル・ツェヴァーアーム」 רֹאשׁוֹמַיִם) で「それらのすべての万象」の意です。「万象」とは「天と地にあるすべてのもの」を意味します。

(2) 「完成された」(「カーラー」 הָלַךְ) の未完了受動・継続 Vav。

●「**その万象**」とは、創世記1章にある「大空、上にある水、下にある水、乾いた所、海、植物(種のできる草、種の入った実を結ぶ果樹、緑の草)、二つの光る物、星、水の生き物、翼のある鳥、地のすべての生き物(家畜、地を這うもの、地の獣)、人(男と女)」です。これらのすべてを用いて、天と地がキリストによって一つとなるように、神はご自身のご計画の全貌を啓示しようとされたのですが、その本意はたとえによって隠されています。

2. 「天と地の万象が完成された」②

- 「その万象」の意味は、後に神の御子イエシュアが人となって来られた時に明らかにされます。それまでは隠されていたのです。

【新改訳2017】コロサイ人への手紙1章15～17節

15 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。**万物**は御子によって造られ、御子のために造られました。

17 御子は**万物**に先立って存在し、**万物**は御子にあって成り立っています。

- すべての「万物」(万象)は、御子を啓示するために存在しているのです。

2. 「天と地の万象が完成された」 ③

● 「**完成した**」の動詞「カーラー」(קָרָר)は名詞と同表記です。名詞は「滅亡、絶滅」という意味ですが、動詞は「完成させる、仕上げる、成し遂げる、全うする、終える」の他に、「尽き果てる、消え失せる、衰え果てる、滅ぼし尽くす、疲れ果てる、終わる、根絶する」という意味があり、両義性のある語彙なのです。

● 「カーラー」(קָרָר)は創造だけではなく、神のご計画のすべてが神の主権によって成し遂げられ、完成することを意味します。その実現を待ち望むのも同じく「カーラー」です。詩篇119篇81, 82節には「慕って絶え入るばかりです」とあります。「慕って絶え入るばかり」とは、神のご計画が成し遂げられることへの待望的表現です。そこには**キリストの充溢への待望**が預言的に啓示されています。

2. 「天と地の万象が完成された」④

【新改訳2017】ローマ人への手紙10章4節

律法が目指すものはキリストです。

それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。

●新改訳「目指す」口語訳「終わり」新共同訳「目標」と訳された「テロス」(τέλος)は、ヘブル語の「カーラー」(קָרָר)です。「終わり、終了、終結、終点」だけでなく、「成就、完成、仕上げ、究極の目標」という意味を含んでいます。イエシュアは「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです」(マタイ5:17)と言われました。それはユダヤ人たちが大切にしてきた割礼、食物規定、断食、安息日といった律法における理解の型紙が、音を立てて崩れ去ることを意味します。

●そのために「第七日」が必要になってくるのです。それは、キリストが「いのちを与える御霊」となって人の霊の中に住む(=とどまる)ことにより、「神の安息」がもたらされる日なのです。

3. 「第七日と神の安息」 ①

- 創世記2章2～3節に進みます。まず2節のみを見てみましょう。

神は第七日に、なさっていたわざを完成し、
第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

アーサー アシエル メラフトー ハツシェヴィーイー バツヨーム エローヒーム ヴアイエハル
וַיְכַל אֱלֹהִים בַּיּוֹם הַשְּׁבִיעִי מְלַאכְתּוֹ אֲשֶׁר עָשָׂה
神がなされた ところの その働きを 第七の 日に 神は 完成された(終わられた)

アーサー アシエル メラフトー ミツコル ハツシェヴィーイー バツヨーム ヴアイシュボート
וַיִּשְׁבֹּת בַּיּוֹם הַשְּׁבִיעִי מִכָּל־מְלַאכְתּוֹ אֲשֶׁר עָשָׂה:
神がなされた ところの その働き **すべてから** 第七の 日に (神は)やめられた(安息された)

3. 「第七日と神の安息」 ②

3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

ハツシェヴィーイー ヨーム エット エローヒーム ヴアイエヴァーレフ
3 וַיְבָרֵךְ אֱלֹהִים אֶת יוֹם הַשְּׁבִיעִי

第七の 日 を 神は 祝福した(未完・ピエル)

ラアソート エローヒーム バーラー アシエル メラフトー ミツコル シャーヴァット ヴォー キー オートー ヴアイエカッデーシュ
וַיְקַדְּשׁ אֶתוֹ כִּי בּוֹ שַׁבַּת מִכָּל מְלַמְּלֹתוֹ אֲשֶׁר בָּרָא אֱלֹהִים לַעֲשׂוֹת׃

造るために 神が 創造された ところの 彼の働きの すべてから 安息された その日に なげなら それを (神は)聖別された

●2章3節の「聖なるものとされた」=「カーダシュ」(קַדְּשׁ)は初めて登場する語彙です。これは「第七日」を特別な日として「取り分ける」ことを意味します。その理由は神がすべての創造の働きをやめられた日だからです。

3. 「第七日と神の安息」 ③

● 2章2～3節の重要な語彙は「**第七日**」と「**やめられた**」です。「やめられた」は「シャーヴァット」(קִשְׁרֹת) で「**休む、安息する**」とも訳されます。2章1～3節の構文は、順次、新たな内容が加えられていくという総合的パラリズムです。

● 1節の「天と地とその万象が完成した日」を、2節では「第七日」とし、その日は神が「なさっていたすべてのわざをやめられた日」であることが記され、3節では神が「その日を祝福して、聖なるものとされた」ことが記されています。つまり、1～3節で**第七日**が**何であるか**が見えて来る構文となっています。創造のわざは第六日で終わったのですが、第七日は、人の創造を完成することで神が満足されただけでなく、神が安息するという「祝福すべき、聖なる日」とされたということです。

3. 「第七日と神の安息」 ④

●神が「安息された」とはどういうことでしょうか。それは、人が神のかたちと似姿として、神の代理者として地を治めることが可能となることで、神はご自身の働きをやめられた(安息された)ということです。「安息」は神の創造の目的ですが、神は今もずっと休むことなく働いておられるのです。

【新改訳2017】ヨハネの福音書5章5～9, 17節

5 そこに(ベテスダの池に)、三十八年も病気にかかっている人がいた。

6 イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」

7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」

8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」

9 するとすぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。

17・・・「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」

3. 「第七日と神の安息」 ⑤

● イエシュアはこのしるしを通して「安息」とは何かを教えようとしています。神が安息日の規定を与えた目的は、人が自分の肉のわざをやめて、完全にキリストを表現することです。私たちがキリストによって完全に支配される時、キリストが私たちのすべてとなる時、初めて**神が休む**(קָנַח)ことができるからです。私たちのからだは完全に贖われたからだとなって完全に神を表現することができるなら、神は初めて休む(安息する)ことができるのです。それは私たちにとっても「安息」となります。なぜなら、肉から解放されて「走っても・・疲れない」からだとなるからです。つまり、私たちが神の望んでいる御子のかたちと似姿になることによって、神は安息を得ることができるのです。

● 「最初のアダム」がエデンの園に置かれたのは、王なる祭司として、神の代理者として地を支配するためでした。このことが回復される時、神は安息されるのです。このことを教えるのが「安息日の制定」でしたが、ユダヤ人たちはその意図を理解することができず、罪と死の律法としてしまったのです。

3. 「第七日と神の安息」 ⑥

- 「安息」を意味する「メヌーハー」 (מְנוּחָה)の初出箇所は以下のとおりです。

【新改訳2017】創世記49章14～15節

14 イッサカルは、たくましいろば、二つの鞍袋の間に身を伏せる。

15 彼は、**休息**の地が快く、その地が麗しいのを見る。

しかし、肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となる。



- 創世記49章で、ヤコブは自分の息子たちに「終わりの日」に起こることを預言しています。つまり彼の息子たちに語られることが、イエシュアについての預言となっているのです。14～15節はイッサカル(=「報い」の意)に対しての預言ですが、そこに「**休息**(メヌーハー)」が出てきます。彼はやがて与えられる休息の地、すなわち約束の地の麗しさを楽しみに待ちつつも、この報いを得るために自ら重荷を負うことを心に定め、奴隷(しもべ)として従うことを決心するということが語られています。これはイエシュア・メシアを預言しているのです(マタイ11:28～30)。

4. 「安息日の休みは、まだ残されている」 ①

【新改訳2017】ヘブル人への手紙4章9～10節

- 9 したがって、**安息日の休み**は、神の民のためにまだ残されています。
- 10 神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、
自分のわざを休むのです。

●9節に「安息日の休み」(回復訳は「安息日の安息」)というフレーズがあります。これは、安息日の制定が真の安息を啓示するものとなっていない、という背景があったことを物語っています。ユダヤ人は「安息日」を厳守することに終始し、そこに隠された「安息」を理解することが出来ませんでした。そのことを表すしるしが「38年間の病人のいやし」でした。ユダヤ人たちの反応は、癒された人に対して、「今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない」と言っただけでなく、イエシュアを迫害し、殺そうとするようになったのです。イエシュアは彼らに対して言われました。「**わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです**」(ヨハネ5:17)。安息なき「38年間の病人」は、イスラエルそのもののたとえです。

4. 「安息日の休みは、まだ残されている」②

● 神が第七日に休まれた(安息された)のは、神のみわざが終わったからではなく、神が願っていたことが達成されたからです。神の願いは、人が地上で神ご自身を表現し、代行することです。これが実現されるときに神は満足され、安息されるのです。これが第七日です。

● 創世記2章1～3節は、神の包括的な出来事です。第七日に神が休まれた(安息された)と同時に、いまだ完全に休まれてはいないのです。神と人がともに安息することが重要なのです。ですから、「安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。」(ヘブル4:9)や「神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」(同、4:10)とされているのです。

4. 「安息日の休みは、まだ残されている」 ③

● 創世記2章1～3節の主要点は「**神の安息**」ということでした。神は「第六日」に人を創造したことに満足されて、それを「非常に良かった」とされました。とすれば、第七日の意義は何だったのでしょうか。それは神が安息されるということでした。しかしそれはまだ完全に成就していません。ですから、三一の神は今も働いておられるのです。

● 一方、私たちが神の安息に入るためには、自分のわざを休む必要があります。自分のわざを休むためには、肉(たましいとからだ)によって生きるのではなく、完全に霊によって生きることが不可欠です。そのためには、私たちが御子のかたちと似姿に造り変えられる必要があるのです。御霊も御子もそのために、とりなしておられるのです。

今回のまとめ

- 14回にわたって学んで来た「原語で味わう創世記第一章」の学びは、これにて終了です。しかし、この箇所で学んだことは必ずしも十分ではありません。特に、最後の「安息」の概念については、さらに深く学ぶ必要があります。
- 「天と地」は「天」と「地」ではなくて、「天と地」で「一」です。特に、神は「その地」に対してとてもこだわっています。神と人がともに住むのは天ではなく、この地だからです。神の御子が種となってこの地に蒔かれることによって、多くの実りがもたらされるのです。種も、種蒔く人も、その種が蒔かれる地も「**すべてキリスト**」なのです。
- 詩篇1篇1節の「アシュレー・ハーイーシュ」(שְׂאֵלָה אִישׁוּ)である御子イエシュアの「なすことはすべて栄える」とあります(3節)。そのことを霊によってさらに尋ね求めたいと願います。その道しるべの一つとして本講義が用いられ、さらなる深みに漕ぎ出せればと願っています。